

総論

日本人にとって
宗教とは何か

〔座談会〕

日本人の宗教観を問う

—日本人の常識は世界の非常識—

日本人の宗教観はいかに世界スタンダードとずれているのか。いかにして形成されてきたものなのか。宗教学・宗教社会学の論客3名が核心を論じあった。

橋爪大三郎

(東京工業大学大学院社会理工学研究科教授・社会学者)

鎌田東二

(京都造形芸術大学教授)

保坂俊司

(麗澤大学教授)

のご専門の立場からご提示いただき、かつ三人でいろいろ話をさせていたただくなかでこの問題をいろいろな方面から論じていきたいと思っております。

橋爪 いまのお話に、日本人の宗教に対する考え方がグローバルスタンダードではない、そのために宗教を怪しげなものとしている、という指摘がありました。ある頃から私も、そういうことに気がづくようになってきました。そこで宗教社会学

保坂 周知のように日本では宗教というイメージのイメージで捉えられるところがところがあり、必ずしもグローバルスタンダードな意味での宗教、つまりの世界一般的に認識されている宗教の視点というのは共有されてません。

ですから、なにか宗教というすぐ悪イメージ、何かめんどくさいものがある宗教だからという形でマイナスイメージで理解されます。しかしこういうところ

を改めなければ、これから世界で起こるであろう、宗教という形で語られるいろいろな現象を理解していくことが日本人にとつては難しくなるだろうと思います。

そこで、まず宗教の今までのイメージを改め、これから世界を動かしていく力としてある宗教を、もう少し客観的に、正確に理解できるようにヒントを提示できればいいのではということで、橋爪先生、鎌田先生、そして保坂で、それぞれ

の授業を始め、学生にも日本人のそんな宗教観は変であると言っています。この認識はやはりもつと世の中に広めていく必要性があると思います。

日本人がなぜそういうふうに考えるようになったのかというの、これはなかなか不思議なんですけれども、まず、自然科学と宗教は相容れない別々のものという認識があります。今は科学の時代であり、ゆえに、宗教の時代でない。科学を信じ、資本主義社会に生き、

科学技術の恩恵を受けているのであるから、当然われわれは宗教の恩恵などは必要ない。と、こんなふうに考える人が多いのです。学

校でもメディアでも、この科学の時代にこんな迷信を信じるのか、そんな言い方が流布しています。

ところがよくよく考えると、科学は宗教、とりわけイスラム教やキリスト教のただ中から生まれてきたわけです。科学は宗教から分離しようと努力したのですが、決して宗教と戦ったり宗教をなくしてしまったりしたわけではなく、歴史的には宗教は依然として大きな力をもったままです。宗教と科学は共存する上に、宗教なしでは科学が成り立たない。科学も宗教的イデオロギーみたいなものである。こういう側面が見落とされていると思います。

保坂 橋爪先生はアメリカのマサチューセッツ工科大学(MIT)におられたが、中にチャーチがありませんでしたか? ハーバードにはありますよね。橋爪 ハーバードはチャーチだらけです。



橋爪大三郎氏、保坂俊司氏、鎌田東二氏(左から)



橋爪大三郎氏

保坂 だけど、ちゃんと諸科学分野と共存していますよね。

橋爪 それはなかなか微妙な問題で、大学はいわば宗教コミュニティでもあるわけです。でも学生はユダヤ人あり、プロテスタントありで多様です。宗派の数だけチャーチがあるというのが正しい姿であるから、たくさんチャーチがあるんですね。

保坂 今、橋爪先生がおっしゃったように、我々が科学と呼んでいるのは、直接的にはイスラムからヨーロッパに持ち込まれた、いわゆる錬金術などから発展してきたものなのですが、本来イスラム



鎌田東二氏

流に言うなら科学というのは神の英知を立証するため人間の知的活動の過程で生まれてきたというものになります。

ですから、我々が科学と呼ぶものは宗教の、神の偉大さの表現の一部なんです。そもそも、サイエンス (science) を「科学」というふうに日本人が訳したこと自体が僕は間違いだっただと思うんです。いちばん最初は「究理学」などと訳されていました。理を究する、つまり神の創った摂理、この完璧なものを、人間が探求してそれを明らかにしていく。

語義どおりにこれが科学の基本なんです。こうして明治の最初はきちんと訳さ



保坂俊司氏

れていたんです。ところが明治の末ぐらになると、「科学」と訳されるようになる。

これは井上哲次郎が明治14年に出した『哲学字彙』に基づくとされています。この科学の「科」というのは「稲の穂が分かれる」という意味ですから、多くの実りのあるもの、逆にいうと分かれてい

るものの意味となる。
つまり科学は対象を分けて学ぶという発想で、植物学あたりをイメージして訳されています。おそらくかなりイデオロギ

一的に訳された言葉であって、「科学」という漢字自体には意味はなさそうです。
現象界に対処しようとするわけですが、そこには非常に超越的な観点があるので、万人がそれを見て納得するというわけではなく、特定の共同体の中では理解されたというものです。

科学というのは、この呪術の垂直的・超越的なメカニズム的思考というのを万人に開かれる形で水平化したものだと思います。科学と呪術の位置は漸近線上にあると思います。方法論や実証性という点ではその違いは大きいですが、その招いている結果、今の現状を見てみると、僕は呪術と科学はすごく近いものではないかと感じています。例えば、呪術は死んだ人を甦らせようとする。科学はクローンを使って、不死の生体を作ろうとする。呪術は魂という超自然的モノを動かそうとしたのに対して、科学は臓器という物を動かそうとするとか。こういうわけで、呪術的な思考が達成してきた世界と、今の科学技術というのが実現しつつあるも

す。「究理学」だったら非常に明確にサイエンスの真意を伝えていきます。

橋爪 「究理」ではなく「科学」がちよどいといと、明治国家が思ったのは、たぶん科学的マインドが日本国民の間に学校教育を通じて広まってしまった場合に、天皇崇拜に影響が出る、日本の国家原理に影響が出る、と心配した人がいたからではないか。そこで、科学が本来持つ全体性や絶対性をそぎ落として、よき臣民の実用の学であるようにと意図したのではないか。なんの証拠もありませんけれど、そういう感じを私は抱きますね。というのは、科学は、知識がバラバラという意味ですから、医学を学ぶけれども生物は分からないとか、化学を学ぶけれども物理を知らないとか、建築をやるけれども社会については知らないとか、こういうことが許されるのです。しかしもとのサイエンスというのは絶対的なもので、この世界は物質できておりそ

れ以外は何もないのだと、統一的な原理により全てを説明しています。ただあまりに対象が複雑だからとりあえず分けておきましょう、ということ、研究分野が分かれているだけなのです。そういう科学の持つ全体性や絶対性の認識が、日本人には希薄なのではないでしょうか。

鎌田 最近僕は、『呪術探求』という雑誌の創刊号に、音楽の観点から、音霊 (おとだま) について書きました。そこで呪術と科学はすごく似ていると書いています。どこが似ているかというと、世界をメカニズムとして捉えているという点においてです。どちらにも要素論的な観点があり、世間や人間はこういう仕組みで動いているから、この要素を組み合わせたら、結びついたり、ずらしたりすれば、必ずこういう結果が招かれるという思考がある。呪術はそれを、儀式的に実現しようとするわけです。これはある独特のロジックといえますか、方法論で

のとは、あるレベルですごく似た構造を持つているなと思います。両者の違いを見るのも大事ですけども、人間の思考や、達成しようとするもの、欲望という点において、科学と呪術の中にある共通性を見ることも大事で、両者を貫いて我々を突き動かしている欲望と思考を見なければならぬ。

呪術と科学に対して宗教は、またひとつ違う側面を持っていると思います。宗教は単にメカニズム的思考でない部分、たとえば倫理性や信仰、愛や悟りといった要素をそこに含み持つんですね。ですから呪術よりもより包摂的なものとして宗教はあって、むしろ宗教の一要素として呪術的なものがあつたのではないかと思えます。だから宗教の中にも科学に発展していくような部分があつた。そういう意味で私は、宗教は人類という生物種が、自分たちの生存をドライブさせていく原動力のようなものではないのかと思

宗教とも言える。両義的ですね。

保坂 民族宗教と普遍宗教という分類で言えば、橋爪先生は普遍宗教を宗教と呼ばれているわけですね。

橋爪 民族宗教は、呪術が高度化していくという論理でたどることもできますし、ほかの民族が宗教を編み出してしまったので自分たちの民族はどうしたらいいのかということ、自分たちなりに高度化はするけれども、でも宗教にはならないという、そんな選択をしたものとして論理をたどることもできる。それが、神道、ヒンズー教かなと思うんですね。**保坂** 他からの影響を受け、仮であってもそれに対して理論武装をするということもあります。

橋爪 そうですね。もう少し付け加えると、科学が呪術と似ているというのはその通りなんですけれども、でも、科学は宗教の圧倒的な影響下にあるので、単なる呪術ではないわけです。呪術と同じ

っています。そういう人類をドライブさせる宗教の中の一要素として呪術があり、その呪術が更に進化を遂げてきたものが科学と考えています。

保坂 イギリスの社会人類学者が、科学と呪術は本質的には区別がつかないと言っています。

鎌田 私は最近医学を勉強しはじめているんです。すると医学が今達成しているクローンやES細胞の研究と応用など、かつて錬金術師が、不老長寿を願った人達に実験しようとしたことを、科学的な方法論をもって現実に達成しようとしているように見えます。そのお話は、大変面白いですね。

私の観点からいくつか言うと、まず呪術は、普遍的で、どんな社会にも必ず存在するということです。人間ならば必ず思い知ることですが、あるがままの世界と自分の思いとは、ずれているわけです。それでもひとは自分の思いのほうを優先

く、個々人が思いを遂げるためにも科学を使えば役立つというのは事実なんですけれども、でも呪術と似ているがためにかえて呪術には敵対的で、呪術を徹底的に排除するというところがあるわけです。呪術と科学は共在できない。

保坂 近代日本の精神世界に良い意味でも、悪い意味でも大きな影響を与えた井上哲次郎は、迷信（宗教）を含むのは呪術的でない。ゆえに、呪術的な神道は宗教でない、という論理を主張していますね。

橋爪 詭弁にも聞こえますけれども、基本は、いま私が言ったことを踏まえてますね。

鎌田 私は最近『ゲド戦記』というのを読んだんです。ル・グインという人の幻想小説で、主人公はゲドという魔法使いです。ハリーポッターに比べて読んでとても面白かったのですが、そこには「真の魔法使いは魔法を使わない」とい

させたいわけですから、自分の思いを原因にして世界に何か結果をもたらしたいと思えます。しかしだからといって、そのとおりには思いが必ずしも叶うわけではない。この思いを技術にしたものを呪術と言えば、決して文化のメインストリームにはならないけれども、どんな社会においても必ずあるものです。

ところが宗教になると、その関係が少しずつれてくる。宗教のほうは深く本質的で、全ての要素を含んでいるので、そういう全体性から社会を説明するという立場になります。そのような宗教は、ある段階に出てくるしかなかったもので、全ての民族が持っているものでもなく、やはりキリスト教や仏教という、ある時期に普遍的な運動として広がったというものではないでしょうか。

鎌田 ヒンズー教徒とか、神道とかはどうなるんですか。

橋爪 そこはですね、呪術とも言え、

う哲学が全巻貫き語られているんです。先ほど橋爪さんが言われたように、子供が呪術に憧れるのは、自分の思いを世界中に敷衍したいと思うからです。ゲドも自分の思い通りになる世界を描いて魔法の修行をはじめますが、魔法というのは実はやればやるほどそこを外れていき、ただ「この世界があるがままにある」ということだけに心が寄り添っていくことなんだということ、やがてゲド自身が悟っていきます。

保坂 『華厳経』みたいですね。

鎌田 魔法と宗教との関係とか、哲学や倫理との関係をそれは描いていると思うんですね。ですから、呪術は誰しもが子供の時にもつような願望や思考を持っている。しかし宗教はそれを純化させ、超えさせてるものを持つ。それでお釈迦さんは呪術を禁止しましたね。つまり「魔法を使うな」と言った。魔法を使うことによって世界は本当に救われたり良

くなるということはないんだというわけです。なぜならば呪い合戦を引き起こしたり、互いに敵対しあつて殺しあつたりすることを繰り返しては、決して真の平安は達成できないということなのです。これは非常に宗教的な、ある種普遍宗教的な世界に行きつきます。

橋爪 面白い話ですね。

いまの話は科学に置きなおしてみると、更に面白いと私は思いました。科学と呪術の違いでもあります。科学にはまず認識があるわけです。認識というのは、自分の思いとは無関係に、客観的にこれはこうなっていると見るわけです。それが真理であり、その真理を追究していこうとする。ですから、まず自分の「思い」を優先している呪術とは異なります。ただ科学にはその後半があり、いったん客観的な法則性を認識すると、それを使って自分の「思い」を達成しようとしてそれを具体化していくように動きま

す。たとえば化学反応を知つたら、こうすれば電池が出来る、というように。これは、科学ではなく、技術や工学と呼ばれるものですが、科学も技術も連関していて、ひと繋がりなんです。

鎌田 まさにポスト呪術ですね。

橋爪 そうなんです。

保坂 欲望を具体化するための一つの違った方向ですね。

橋爪 ですから、科学は認識なんですけれども、それを実践すると、呪術と同じ効果を生む。たとえば、先進国が自分の「思い」を遂げた結果、後進国が自分の「思い」を遂げられなくなったりするという、そういう世界が実現するわけです。

科学はやりすぎると環境破壊的になるというので、科学の側でも地球に優しい、環境に優しい科学技術でなければならぬと言います。しかし、これはよく考えてみると自己矛盾です。もし、地球に優

を超越していく論理的地平、かくある世界のあるべき、またありうるディメンションを提示するという意味では、科学の今ある立場は、かつてのある時代の世界宗教が達成してきたものにも近いですね。

橋爪 けれども、そこがなかなか難しい。たとえば国際環境サミットなどでは、いわゆる環境ディカリストたちがやって来て、大暴れをするわけです。このグローバル化で資本が地球大で産業を動かす、結果、遺伝子改造した農産物がつぎつぎ出てきた。だからこの破壊性の高まった現代文明を阻止し、平安を取り戻そうということを訴えます。しかし、不思議な事にこの人たちは、インターネットを使って連絡して同志を集めたりなどしているんですよ。だから彼らが果たして・・・(笑)

鎌田 飛行機に乗ってやってくる。

橋爪 そう。飛行機に乗ってやってきて、ホテルに泊まって、国際会議阻止。

つまり、彼らは、本当の意味でこの文明を阻止する力量や代替プランがあるかどうか、大変疑問なんです。ですから、科学が環境問題を契機として宗教化するというのは、簡単ではない、非常に難しい問題ではないかと思えます。

鎌田 それでは、最初の話に戻りますが、現代日本においては宗教不信が非常に高まっているのが現状です。その高じた原因は、「信教の自由」をめぐる戦後日本の様相にあると思われれます。戦後は周知のとおり信教の自由原則というのが最大限に憲法上で約束されました。ところがその自由が、「信教の自由」というのみならず、その対極の戦前・戦中の信教の抑圧に似た、「自由な信教の抑圧」という自由に転じてきている。そういう中でオウム真理教事件やそれに絡む様々な宗教グループが引き起こした社会的事件、あるいは宗教的な表象が多分に関連する酒鬼薔薇事件などが勃発すればする

しく、今から100年後に生まれる世代が今の世代と全く同じだけの資源を消費する権利(機会)をもととするならば、石油を1滴でも使えば、その分だけ後々の世代の権利がなくなってしまうわけですから、結局資源を使わないのが一番いい。つまり、人為的に自分の「思い」を遂げようとするのを、100%断念して、初めて地球を守るわけです。

鎌田 そうすると科学は宗教に近づいているかもしれないですね。つまりいわゆる世界全体の平安度をどう導き出せるか、ということ。これまで科学はたとえば資本の欲望に使われてきた。資本主義や会社、国家の野心や利益の追求のために、科学本来がめざすものは一つの理論として追い出され、科学は技術として産業を生み、商品を通わせ、その結果世界を呪術的に壊すような、そういう段階にまで使われてしまった。しかし、これが立ち行かないとなつたいま、それほど、我々の多くは宗教に対して不信感を抱くようになっていった。これではもう、毛嫌いなものというのか、宗教を最初から怪しいものとみる観点しか招かない。

しかし、こういうものの見方は大変偏りがあると、先ほどから指摘されている通りだと思ふんですよ。その一つの例を挙げるとすると、日本の首相、森前首相が「神の国」発言をして物議をかもし、首相の座を追われるぐらいの問題となりましたね。

ところがアメリカのブッシュ大統領が、アフガン戦やイラク戦を攻撃するときには、「God Bless America」(神よアメリカに祝福を)と繰り返し世界に強調して、これはなんの問題になるどころか、アメリカ国民にも支持された。私は「神の国」発言も「God Bless America」も、神とこの世界がどういふふう結びついているかを語るひとつの言説だと思ふん

です。ところがその言葉がこの二つの国においては、ぜんぜん違う形で理解されるということだ。

どちらも「信教の自由」を標榜する自由主義の地だと言われています。しかし、日本の自由主義には、宗教に対する、特に信仰を持つひとたちの自由を極めて抑圧するような態勢があり、これは非常に不思議な「信教の自由」の考え方だと私は思っております。そこには宗教に対する明確な知識もなく、公平にもものを見ていこうという冷静なまなざしもない。

保坂 これはなかなか、歴史的にも議論が入り組むところかと思えます。整理しますと、端的には日本の戦前は、今のアメリカと同じように神が祝福した国（いわゆる神国思想）だったわけですから、戦前の日本人なら、今のアメリカカ政治というのはよくわかるだろうと思えます。

中村元先生が明治までの仏教用語とし

ての「宗教」という語を歴史的にみて整理されました。

基本的にはこの「宗教」という語は、サンスクリット語のシタンターナーヤという言葉が、元来サンスクリットにある考え方で中国にはない言葉であったので、それをどう翻訳しようかということ、造られた仏教用語なのです。その本来の意味は「見えないものを言葉にする」ということです。

インドには一般に真理の本質は言葉に出来ないという考え方があります。それを中国語でどう表現したらいいのかという時に、「宗」というのは根本原理、「教」というのは言葉に表すという漢字の意味ですから、これをあわせて「宗教」としたので。こういう言葉にならない本質を言葉にしたのが「宗教」でして、その考え方は明治にいたるまで続きます。

ところが今度はそれが、「religion」というヨーロッパの言葉が入ってきて、明

治の初年にこれが「宗教」というかたちで置き換わるんです。

すると、「宗教」という言葉の中に、二つの意味が出てくるわけです。仏教的なものといわれるヨーロッパの伝統。さらにこのヨーロッパの伝統にも、ローマ以来の伝統とキリスト教化した後の伝統、という二つがあるので、いづれにしても普遍的なもの、目に見えない神というようなものを言語化したのが、「宗教」という言葉であったわけですから。

そこへ明治時代ともなると、神道を非宗教化して国家原理にした。しかし、ヨーロッパとの関係から神道を宗教として特殊扱いする事は出来ない。

そこで、神道非宗教論、というのを造るわけです。そこでその他の宗教は一律に許して、いわば明治的な信教の自由が約されました。

しかし神道は宗教ではないので、神社

を建て、神官を公務員にして、というかたちで国家が保護していくわけです。ただし神道は基本的に宗教ですから、ここに「宗教」という言葉の中にある著しいねじれ現象が出てくる。

当時、宗教と神道をどう区別したかというところ、宗教とは簡単にいいますと、「知的半人前」とされました。それから、貧・病・争というようなひとりでしかも生きていけないような人が頼るものと看做された。かたや神道は国家を担っていき、まともな人間が神道—当時は神道とは言わず、大教、道徳教または国家原理と呼ばれていた—を奉じるものだとされていた。

だから宗教を信じているというなら、それは自分が半人前、あるいは知的に劣っている、と語っているに等しかった。こういう宗教に対するマイナスイメージというもの、伝統として戦後にまでずっと残ってきてしまったといえます。

それが今でも非常に尾を引いている。戦後は戦前の神道優先策、いわゆる神国日本的な発想が反省されているわけです。

橋爪 つまり、明治国家は神道が宗教でないという政策をとり、その裏返しで戦後は、神道は宗教であるという見方に立ったということ。こういう歴史的な揺れ戻しで、日本人個人は、宗教と距離を取れなくなっているとも言えます。

なぜ明治国家は神道を国教とし、しかも宗教でないと言い張ったのか。神道を宗教だと言い、それを国教にしてしまえば一番簡単だったとも言える。

鎌田 そうすれば、混乱はなかった。**橋爪** それはなぜなのか。簡単に言ってしまうと、明治国家は、純然たる世俗国家ではなく、民族共同体という性格をそこに残しておきたかったのです。この日本という土地でまともに生きていくのであれば、自立した個人になるより先に、

日本国家の一人前のメンバーになれというわけです。そのメンバーになって、共同体の要請に従って動かないような奴は、どんなにまともなことを考えていようと認めないぞというわけです。どうしても好きなことをやりたければ、それは女、子供であるときみならず。だから個人が宗教と関わらなくなったんですね。個人が精神的に自立するために宗教を手段にする、足がかりにするということがもはやできなくなるわけです。これは戦後も同じなんですね。そしてこれがあまりに深い記憶なので、このこと自身を日本人が意識できない。

鎌田 今のお話の、保坂さんが「宗教」という言葉が、明治以前から以後にかけてどのように日本社会である種、混乱して用いられたかを整理されました。私の見解では明治維新前後に、神観革命という神についてのコンセプトを作り変えようとして、政策が分裂状態になってしま

ったのがそもそも問題だったのではと思
っています。それはまず、明治元年に神
仏分離令といわれる神仏分離政策をやっ
ていきます。これは本来分離し難いもの
を無理に分離しようとしたものです。神
についての観念が明確でないまま無理やり
神仏分離を図ったのです。たとえば現在
神社に祀られている神様でも、昔も今も
土地の人でもよくわからないという神様
がのが現状なのです。

それから国民の側からすると、たとえ
ば修験道という伝統も歪になった。修験
道の人達は在家の仏教徒でもありませ
んが、同時に山を中心とした伝来の暮らし
を保っていました。ところが、キリスト
教を公認したと同時に、修験道は廃止さ
れる。政府は後に公的には信教の自由を
確立していくわけですけども、日本人
の信教の自由をここで根本的に踏みにじ
っているわけです。修験道とは日本人が
独自に持っていた民俗宗教の一つの重要

したならば、それは仏教的なものではあり
えない。そこでそれを神であるとし、神
仏分離を実行する。そうするならば、天皇
は仏教徒ではなくなる。全ての人々は家
に属し、仏教徒であるけれども、天皇だ
けが神の末裔であり、神なる超越的な原
理を持っているということになる。そこ
で人々は仏教と違った原理によって天皇
と結びつかなければならぬ。それが神
道です。

明治維新の国家建設とは、こういう概念
によって行われていて、幕藩制とは違う
のだということ、強行に主張するため、
神仏分離を行ったと言えます。神祇官も
置かれ、この神仏分離の体制は明治初年
に早々に定着してしまいうわけです。一般
庶民にも、葬式は仏教でやり、近郷近在
のお祭など家族を超えたものは神社でや
ればいいと理解され、おおまかには神仏
分離は成功した。

鎌田 その新しい公共空間の「公共」

な基盤です。それを無理やり神仏分離の
方向、延長線で破壊した。

一方、神道でも、民衆の中から起こって
きた、たとえば天理教、金光教、黒住教
も、日本の伝統的な、あるいは新しいど
この神社に祀られているとも分らない
ような神様を奉じていた。それがやがて
国家公認の宗教になっていくわけですけ
れども、それは教派神道ですと枠付けさ
れた。

民衆の生活事態は大きく変わらないに
しても、国家政策による上からの革命と、
下からの民衆の中から育ってきている神
仏観との分裂は明らかで、その後何度も
民俗宗教を抑圧するような事件が起き、
それにつれて民衆の神についての素朴な
理解や感覚がどんどん希釈されていっ
た。そうして、宗教をより国家的なもの
に寄り添うようなものに造りかえていっ
たわけです。これはすごく大きい問題だ
った。この政策のもたらした矛盾を未だ

とはどういう公共だったんですか。

橋爪 まず、税金です。天皇が税金を
取るという制度が始まり、年貢がなくな
った。

鎌田 それまでも税金は取っていたん
でしょう、幕藩体制は。

橋爪 大名が取っていたのであって、将
軍が取っていたわけではない。

鎌田 でも、参勤交代とかで、将軍は
家に上納されるわけでしょう。

橋爪 大名から将軍への上納はないよ。

鎌田 まったくないのですか。將軍家
の直轄地だけですか。

橋爪 天領だけ。あとは臨時の「中央
交付税」があっただけで。天皇の直接税
を農民個人にかけたというのは革命的な
ことです。

それともうひとつは兵役です。こうい
う国家に対する貢献、ナシヨナリズムは、
明治以前にはありえなかつたわけですか
ら、これを創り出したという点では大成

解決できないままそれを引きずっている
のではないか、というのが僕の考えです。
橋爪 その通りですね。でもそれは失
敗といえれば失敗なんですけれども、所期
の目的を達したという点では成功である
とも思います。

幕末維新のときにどうして神仏分離令
が、大した準備もないまま強行されなけ
ればいけなかつたかという点、ハーバマ
スの言う、公共性の構造転換という言葉
を思い出すけれども、そこで新しい公共
空間を創り出す必要性があったんです。
幕藩制は、家の原理で出来ているわけ
ですから、下は庶民の家から、武士の家、
大名の家、將軍家、そして天皇も家です。
全てが家であって、家が宗教的にはどう
いう表現を持つかという点、やはり葬式
と家が関係してきますから、仏教により被
覆されてしまっているわけです。

そこで、もしここから家とは違った原
理によって公共的なものを存在させると

功だったと思います。

保坂 私は明治政府というのは神道原
理主義のその運動として創られた宗教空
間であり、それが完成したのは大正、昭
和になってからだと見ています。同じ理
想もおじいちゃん、親、子供と三代共有
されなければ定着しません。すると一つ
の政策が定着するには大体少なくとも5
0年かかるのです。だから明治政府が方
向付けをした、家の上に県があり、県の
上に国家があるというヒエラルキーがま
さに本当に完成するのは大正になってか
らになります。そしてそれが本当に社会
的に機能しだしたのが昭和のウルトラナ
シヨナリズムで、そのまま戦争へと突っ
走るわけです。

ですから私は靖国神社を造ったという
こと自体が、明治国家が伝統的な日本神
道に相反したと思っています。明治政府
の正統性を神道的に権威づけをするため
に靖国神社を造らざるを得なかつたので

す。ご承知のように歴代の天皇は決して伊勢神宮にお参りすることはなかったのです。

明治天皇が明治2年に、在位した天皇として初めて伊勢神宮にお参りしました。だからよくインドの人に今の日本の政権は明治ダイナステイ、明治王朝と言われるんです。血統的には続いていますが、権力構造としては明治というのは新しい王朝なんだというわけです。そう考えるとこれは王朝の正統性を創るためのシステムだったと言えます。

鎌田 一種の宗教革命みたいなものですね。

保坂 いい悪いは別ですが、そういう視点で、近代をみていくならまた少し違って見えるのかなという気がします。

橋爪 9・11の話をしましようか。

鎌田 近代以降の日本が抱える歴史的、地理的な特有の問題において、宗教にもまた日本独特の編成の仕方があった

も三歩も後退してしまったという大きなフラストレーションを抱えた時期というのが、1970年頃ごろまでの25年ほど続く。この時期には、神道原理主義に代わるものとして、マルクス原理主義などが登場した。ただしこれは産業、軍隊を推し進めるといふ力学にはならないで、一種の反社会的な動きになっていった。社会主義Ⅱマルクス主義Ⅱ原理主義は、農民からは支持されず、マジョリティにはなれなかった。そして1970年以降には、これは立ち消えになってしまう。そういう原理主義や過激主義を支えるだけのルサンチマンが日本のなかから消えていき、以後こういう動きはなくなってしまうた。

それと同時に、宗教の必要性や宗教のかたちを借りた呪術的な新興宗教の可能性は、急激に薄まった。そこに残ったのは、「宗教は危ない」という一般認識だけで、逆に言うと、ごく一部の人たちだ

と思います。それが明治以降にドラステイックに変わり、次いでまたそれが戦後ドラステイックに壊れたという、色々な作り換えと壊れ方がありました。1990年代にはオウム真理教事件をはじめとしてそれは次の展開に入りましたが、21世紀に転じて2001年には9・11の世界的な事件が起こりました。人々もこの事件のある種オウム事件と重ね合わせたり、または神風特攻隊を想起したりして、宗教によるファナティックな行動への警戒心を一層増していったという状況です。そこでこの9・11をどうとらえるかということ、これからの21世紀の宗教の問題点を考えていくうえで大事な試金石になると思います。分岐点かもしれない。

橋爪 今までの話を踏まえて言えば、明治国家の抱えた課題というのは、日本が発展途上国である、世界の大勢からとり残されて遅れているという、現状に対

けが宗教に強烈にのめりこんでいくという状況です。

これが9・11までに出来上がっていた日本人の状態ではないかと思えます。

9・11の背後にはアラブの大きなルサンチマンがあると思うのですが、そのルサンチマン自体を、もはや日本人が抱えていないのです。これももし明治中期や明治末年だったら、「アルカイダ・グループ、よくやった」とか、「俺たちも一緒にやってみよう」「アルカイダに連帯する」とかいった運動が、起こっただろうと思うのですが。(笑)

保坂 ありえますね。

橋爪 しかし、今の日本では全く起こらない。

保坂 「テロはいけない！」と言うだけで、まったく他人事です。本質がどうなっているのかまったくわかっていない。ただ、おそらく9・11を見て、「これからは宗教をちよつとは知ってお

する非常なフラストレーション、孤立感だったと指摘できます。日本の近代化の根柢にあるものはコンプレックスであり、それを処理してプラスのエネルギーに変えないといけない、なんとしても先進国に追いつきたい、というわけです。

そこで、近代的な産業のなかで神道的なメンタリティーで自己献身をし、その収穫物を手に入れようとする方法を採用しました。神道の伝統からすれば、近代産業は農耕ではないですから、それは矛盾するわけです。

たとえば日本陸軍から皇道派などが出てくるのは実に奇妙なんですけれども、でもそれは神道原理主義の考え方とみれば、不自然ではない。

ただしこの方法論は、敗戦したという事実で失敗してしまいました。この失敗後、皇道派が代表する神道原理主義ではやっていけないと知る。しかし先進国にやはりまだまだ遅れている、むしろ二歩

かないとまずいな」というぐらいには思ったのではないですか。

橋爪 それはそうですね。

保坂 しかしどこから手をつけていいのか、あるいはどういうふうに見据えていけばいいのか、誰もよく教えてくれない。若い人たちが、しっかりとこの現実を理解できるような議論を、あるいは考え方を、橋爪先生とか鎌田先生とか私たちが作っていかなければならないのかなという気はします。

鎌田 私は早稲田大学で15年ほど教えてきましたが、あの事件後、間違いなくイスラムについてよく知りたいという学生の知的欲求が高まってきています。先ほどルサンチマンと言われましたが、世界がどういう理由と経緯でこうなっているのかということを明確に理解したいという欲求がはつきりと今あらわれてきています。宗教学にたずさわる者として、それに答えられる文明史や宗教史や社会

理論や社会へのまなざしを伝えていく必要があると思います。

そのためには複数の視点と大きなスキームを描かなければいけない。これまでの私たちが知る世界史は、西洋原理をそのままグローバルスタンダードにした視点で書かれていた。だから例えばインドを起点にして世界を見たり、中国を起点にものを考えるという見方が出来なくなっ

た。しかしひるがえれば、江戸時代には中国を起点にして見る儒学の伝統などがあった。ところが我々はそういう複数のものの見方もほとんどしなくなっている。科学に立脚するか、西洋的な世界史の見方に立脚するか、あるいは両方をタイアップしたような見方しかない。

そういうわけで、見落とされてきたのは、まずイスラム。次にネイティヴ・アメリカンのこともほとんど知らない。実はそれを知れば知るほど、それが我々の

文化の基層にあるものに似ているというのに気づくのですが、依然として、古代的な文化・伝統と、世界宗教で一番新しく登場してきたイスラムについては知らないままです。日本に習俗化した身近な仏教については知っているけれども、たとえばバラモン教やヒンドゥー教についてはよく知らない。こういう特異で偏った状況がずっと戦後日本の知的状況だったと思うのです。

橋爪 アメリカでも、1950年代に物質的繁栄がその極に達して、世界のトップを走っているという感覚が生まれたとき、社会全体が方向感覚を失うという現象がありました。その頃、ポップ・カルチャーがひとつのピークを迎えたわけです。男の子は女の子に関心を持ち、ただ幸せに充足しようとして、その外には世界がないわけです。ところがそれがあるところまで行くと反転して、1960年代にはヒッピームーヴメントとかベト

ナム反戦という、そこから抜け出して世界と関わろうといういろいろな運動ができてきます。

日本でも、しばらく前から日本的ポップカルチャーが頂点を迎えていたと思うのですが、9・11の後では、それを乗り越えようという潜在的な意識も強まってきたと思うんですよ。たまたまこのあいだ近所の女子高校で「戦争と宗教と社会について話してください」と言われて講演したのですが、その後講演を聴いての感想文が多数きました。どれを読んでも「今まで戦争なんかも興味 wasn't なかったし、宗教も知らなかったけれども最近私は関心がある」みたいなことが書いてある。講演後に私のところに来た生徒達からは「北朝鮮はどうなる」とか「私達にできることはないか」と、おおよそ渋谷できゃびきゃびしている人びとは全然異なる質問がどんどん出てきた。若い人たちの中に、別の深層の意識

として、現在の自分の小状況を越えていきたいという要求が、9・11をきっかけに大きくなっているという気もするんです。

鎌田 間違いなくあるでしょうね。

保坂 世界と結びついている。

橋爪 宮台さんの言葉を借りれば、「世界を知らずに、今を楽しく生きるよりも、世界を知って正しく生きたい」ということです。

鎌田 ツイン・タワーの崩壊を見たらじっとしていられなくなるでしょうね。いくらテレビで見ている。

保坂 今までは宗教を知らなくても、普通に皆働いて一緒にいればそれでよかったです。ところが繁栄の絶頂がああいう形で崩れていくのを見てしまう。すると宗教という今まで見えないからということで見ないで済ましてきたものに、少しは関心を示さなければ足元が危なくなってきたというぐらいのことは感じている。

鎌田 1990年代に湾岸戦争が起こる頃、ハンチントンの有名な「文明の衝突」論が世に出ました。そこで面白い観点だと思ったのは、儒教・イスラムコネクションが、ヨーロッパ・キリスト教原理に対抗するものを提示し対立して、いざれ文明の緩衝地で必ず紛争が起こるだろうと予測を立てている。

それ自体は現実をふまえた政治理論です。すからある程度はあつたわけですが、彼は「文明を支える一番のアイデンティティとは宗教である」と指摘しています。つまり人類の政治と文明をドライブさせていくほどの力が実は宗教にあるということです。宗教は国家や政治の局面で、結託したり利用されたりして色々な問題を引き起こしてきたという半面、個人個人の信仰生活や心の平安といった、世界観を解放したり救済したり変革したりする、一種の「解放の神学」というようなはたらきもたらしてきた。

つまり宗教にはその解放の神学的な方向と、それに正反する弾圧的・抑圧的信仰による、権力ときわめて結びつき易い方向が両面ある。宗教がどう権力と結びつくかによっては宗教は、予想を超えた呪術的な力を発揮して、巨大な黒魔術ともいえる体制をつくるということもあり得る。そういう歴史上の宗教がもつ可能性や問題点を我々はひとつづつきちんと見て、それを位置づけていくという視点は欠かしてはならないと思います。

橋爪 9・11事件の驚きの根本を考えてみたいのですが、戦争にせよテロにせよ、これは破壊なんですね。日本人が戦争の教訓として学んだのは、戦争は幸福につながる道ではないので戦争はしない、経済活動に集中すれば幸せが得られる、という考えだったのです。そういう考え方では、戦争にうってでるとか、テロに訴えたりするとかいうことは、幸せを放棄することにほかならないのでそれ

が理解できないんです。なぜそんなことをするのか。にもかかわらずそれが起こってしまったということは、世界は自分が理解していたとおりにあるのではないということになる。つまり、全く不条理な世界に自分が生きているということを目撃する。そして同時に、自分が戦争の意図を放棄したと言っても、戦争から逃れられるわけではないということも、ようやくわかってきたわけです。

保坂 つまり、宗教をもつ身近なものとして主体的に考えるということ。私は私の学生にイスラム教の拡大を本当の意味で理解したければ、「伊勢神宮がモスクになる」という、そういう極端な例を考えながらやっていくべきだと言ってきました。すると生徒は、常識はずれなことを言つて、と笑うんですよ。

しかしこれはインドやパキスタンでは当たり前なことなんです。たとえば、1992年の12月に起こったバーブリー・

モスク事件。ヒンドゥー教徒はひとつのイスラムのモスクを壊したんです。それに対してイスラム教徒はヒンドゥー寺院を300も400も壊したんです。そういう現実を身近なものに関連させていかなければ、日本人には実感というのがわかない。

ですから、9・11が起こったというのは、やはりインバクトのある大きな事件だったと言えます。

鎌田 1995年というのは、歴史的に振り返れば日本のある切り替わりを示していると思えます。9・11に到る日本の状況として、この1995年の1・17阪神淡路大震災、3・20のオウム・サリン事件は、先ほど橋爪さんが言われた「地滑り状態」で、それを日本人が身近に経験したということだと見ます。

神戸という繁栄した都市が、目の前でツインビルが倒壊していくように倒壊し

消するならそれは無常観になっていく。

しかし、オウムのサリン事件の場合は考え方の違いという、テロと同根の要素があり、それだからこそそこから教訓を汲み取るべきだった。結果はせいぜい「宗教は危ない」という非常に卑俗な感想にとどめられてしまって、人間個人の抱く知のシステムがどれだけ大きな事柄を我々の間に引き起こしているかという問題としては、全然捉えられなかった。

でも9・11の場合はそうはいかない。我々が解決せず宿題にしていたものが、この9・11で、もう一度やってきたのだと思う。宗教がそのままテロや戦争を引き起こしたとは言わないけれども、宗教はその要因として非常に重要だ。

宗教は、我々が手に触れることのできる精緻で強力な知のシステムのかなりの部分を占めているわけであって、それと接触しながら自分や他者の知のシステムを鍛えていくものです。そしてその上に、

ていくのを我々は見た。酒鬼薔薇もあの辺りに住んでいて、廃墟を歩いていた。そして続いて地下鉄サリン事件が起こった。これはひとつの宗教集団が、霞ヶ関の全体を殲滅させようという意図を持つて起こした事件です。あの年は自然災害と人為的なイデオロギーによる事件が同時発生した年でした。

ただその時に起こった日本の「地滑り現象」に対するケアがフォローできないままに今に至っていて、だから9・11を見ても日本人の現実的な対応は同じです。政治的な変化だけは着々と進行していて、私は反対ですが、「日米安保条約だけでは足りない」「憲法も改正していかなくてはいけない」「有事法制が必要だ」という方向に法律も編成しなおされてきているのに、人間の心自体がそういう崩壊という事態に対応できないまま今日まで来ている。

凶悪犯罪が次々と起こっているという

政治的国家とが築かれていく。政治的国家は、政教分離の原則で出来ていますが、宗教に対してどういう距離をとるのかも、そこに織り込まれているものです。

しかし日本人は、個々人が成熟した知のシステムを持ち、それをバランスさせるために政治的国家を持つなどとは思っていない。いわば日本の宗教は、相互に衝突しないまま野放し状態なんですね。ここが宗教的対話が充実している宗教の先進国とは大きく違う点で、日本においてはまったく幼稚な宗教がただ妄想的に先鋭化していくということが起こりやすいと思います。

鎌田 宗教的対話が充実している先進国とはこのことですか？

保坂 正邪がきつちりと議論できるということですね。

橋爪 表層的なレベルでもいい。たとえば「オウム真理教というのは仏教じゃないんだね」とか、そういうことを日本

ことと、40代から50代の中高年の自殺率がもの凄く高まっているということ、これが並行して起こっているということ、は、我々の今の「地滑り状態」を象徴しているようだと思っています。そこでこういう事態に宗教はどういう力を持つのか。私は老人問題や共同体の問題、さらに人間の死生観をもう一度考え直していく上では、宗教は非常に大きな力を持つと思っています。しかし現実には既存の教団宗教のその多くはこの問題では立ち遅れていると実感していますが。

橋爪 テロと戦争が破壊であり、ゆえに経済原理からみるとそれは理解できないと先ほど言いましたが、テロや戦争を引き起こしているのは、つき詰めるなら、人間の考え方の違い、世界を見る見方の違いに起因しており、それは経済的な問題だけでは回収できない問題です。阪神淡路の場合は自然災害でしたから、確かに地滑り感があったけれども、これを解

では普通の人がなかなか言いません。

保坂 専門家の人も言いませんでしたけど(笑)。インドでもどこでも新宗教はあります。だけど社会的に信用あるオーストリテイたる人物がその「いい」「悪い」は言っていますね。

鎌田 オウム真理教の事件が起きた年に、日本の宗教学が問われたのだと思います。

宗教学は本来、正邪の判断について価値判断をくだすことを避け、より客観的で中立的な事実認識により、宗教現象を描き出していくという方法的態度をとってきました。かつて明治20年から30年ごろ、井上哲次郎や井上円了などが、「これは正しい宗教であるか否か」と正邪の別を論じていったその成果は、明確な形としては宗教学にはほとんど定着をみませんでした。学問的にはひとつひとつの個別なものを見るや、知的な緻密な研究を積んでいくけれども、それが一体

なりアクションをとったのかの内実が問われていくわけです。

橋爪 大変困った問題は、オウムが刑事事件を起こしたので話がおしまいになっちゃったことです。事件を起こした連中がなにを言おうと、反論する要もないという扱いになった。しかし、事件が裁判で処理されるということ、その事件に参与していた人たちがある教理を述べたり、判断を下したりした場合にそれが正しいのかどうかを問うことは、両者全く別々に決着すべきことです。刑事事件を起こしていようがいまいが、それを宗教的な言説として取り上げて、その正邪を検討するという手順が、宗教者によってであれ宗教学者によってであれ、踏まれるべきであったのですが、実際にはそれを誰もしていません。

鎌田 「私の中のオウム」あるいは「我々の中にあるオウム」を拭い去ろうとした人たちもいたと思います。その悪

何であるかということはある基準を持ち、批判的に見直すという視点を宗教学はかなり欠落させてきたと私は思います。そこではものを価値批判的にきちんと見るといふまなざしを育ててこなかった。

保坂 私は、宗教学はそれでいいと思います。オウム事件についての最大の問題は、「我々は仏教の正統である」というオウムの存在が、あのような殺人事件を含んだ問題を起こしたその時に、それをめぐる宗教者同士の間できちんとした議論がなされなかったということにあると思う。

宗教者の誰ひとり、「俺は違うと思う。そんなものは宗教じゃない」とは言わなかった。ここで私が言う宗教者とは仏教徒です。仏教徒が誰も言わなかったことが問題なんですよ。

宗教学者の場合は学者ですから、内面的な自分の意見を言ったところで、それの一つの先行例として、かつて政府に淫邪教として弾圧された大本教事件があります。もちろんオウム事件とはまた全然違う位相を持った事件でしたが、この弾圧時に問題になったことが結果もみ消されたというのか、解消されたんですね。大本教事件が問いかけたものが何であったのか、大本の価値は何だったのかということが答えられないまま、日本の言論メディアも政府も、ただ邪教、邪宗と言いつつ続けた。ではその邪教の根拠は何なのかは問題にもされないままに通り過ぎていった。こういう積み重ねの延長上に今のオウム事件もあると思っています。

私は麻原彰晃が言っていた、ヨガ行者あるいは修行者が持つ「魔境」というものが一体何なのかということにずっとこだわってきました。自分の本の中でも、また今月刊誌の「すばる」で、「呪殺魔境論」と題して連載を書いているのですが、呪い殺すとか、魔境とかが一体ど

は宗教学者としての本来の姿ではないと思います。

鎌田 私はそういうふうには思いません。宗教学者であっても宗教者であっても、あるひとつのまなざしで意見を言っていると思います。たとえば中沢新一にしても島田裕己にしても、オウムの宗教的意味を積極的に評価したひとが一定数いて、その言説が社会的な知的流通の中に乗っていたのは事実なんです。こういう体験的な宗教理解の方法論が、今までの客観的、中立的立場にたつ宗教学に対する批判として、宗教学の内部において出てきたとしてもいいと思います。また、それに対する批判があってもいい。

保坂 新宗教との関わりでいえばそうですね。

鎌田 問題は宗教者に対してはもちろんのこと、宗教学者にも問われたわけです。だからどちらにとってもオウムの事件は突き刺さってきた。これにどのよう

ういうことなのか、ということ論じています。これを突き詰めることが自分ができる最低限の義務、責任だと思っています。そういう問題を手掛かりにしていかなければ、私にとっては、この問題に直面し、解きほぐすきっかけはないのですよ。

保坂 私はそれは日本の伝統が依然ずつとあるからだと思います。廃仏毀釈の現地調査をしてみますと、ほとんどの地域で全く伝承がないのです。記録でさえも残されていない。それは自分たちのほんの三代前ぐらいのじいちゃん、ばあちゃんがやったことなんですけど。

鎌田 消されてる？

保坂 都合が悪いと思うんでしょう。だから消してしまうんです。たまたま九十歳ぐらいのおばあちゃんが話してくれろということになり、話がそこで始まったら、横から「おばあちゃん、黙ってる」と声がする。そのおばあちゃんの父親が

その地域の指導者で当時の廃仏毀釈を担ったらしい。

自分は調査に来たのですから、詰問しましたよ。ほとんどの場合がそうですが、現地にいきなり行ったら、絶対教えてくれない。そういう形で隠蔽してしまって、彼らも考えることをやめてしまつて、歴史の事実を隠蔽するということが繰り返される。でもそれによつて保たれる平和というのもあるんでしょうが。

鎌田 戦争責任が問われなみたいなもの。

保坂 それは一種の共同体的な安全弁みたいなものなんでしょうけれども。

橋爪 考えることをやめて保たれる平和もあるけど質が悪い。

保坂 非常にね。

橋爪 しかし日本人の論理からすると、9・11は犯罪なのだから、アルカイダのような犯罪者が何を考えていても、私たちには関係ないと済ませかねないです

という時代は終わったといえます。こちらが理解しようがしまいがむこうは土足で踏み込んでくるわけです。

そういうときにわれわれはパニックになりそれに過剰反応するのではなく、ある程度相手の性質などを理解し対応するべきです。たとえて言えば一種のワクチンですね。私は宗教を学ぶというのはワクチンだと考えてもいいと思います。あんまり強いのがいちどきに入つてくると、大変なことになってしまいますが、知識として、相手の弾が飛んでこないくらいに関係で相手の危険性なり有益性なりを測つていくと、相手をバランスよく理解していきます。

21世紀はもうそういう時代になつてきていると思います。2001年の最初に、ローマ法王やイランのハタミ大統領が世界平和宣言をして、バーミヤンの仏像を爆破させたりしたことを問題にし、問題全般をそれで沈静化しました。

ね。

先ほども「わが内なるオウム」というのがありましたが、これも思考停止だと思ふんですよ。オウムは私と異質だと思ふからこそ知的討議と対話が始まるのであり、私とオウムは同じ、ある程度わかるような気がすると言つてしまつたら、そこで大半の人は思考停止してしまふんですよ。犯罪者だから対話する必要がないというのとまた別の、思考停止のヴァージョンだと思います。

鎌田 それには異論あります。というのはオウムが立ち至つていく要因には、仏教なら仏教、ヨガならヨガを修行していくプロセスの中で必ず起こつていくようなある段階があるわけです。それは宗教の内部にいる人が、自覚的にそれを見つめることによつてしか見えてこない問題です。

つまり宗教的な体験の内部で起こつてくることを必ず問うということですよ。た

それが宗教の持つ有益性でしょう。しかしあの9・11事件で、すべては帳消しになつてしまいました。21世紀のはじめにこういう二つの宗教に関わる出来事がありました。そこでそれをよく理解していく意味でも今回の企画をさせていただきました。

鎌田 私も宗教が免疫系だという考え方はよくわかります。それに対して、宗教は翻訳機みたいな役割を持つものだと思います。それから宗教の良い面悪い面といった問題を考えるとき、私の頭を離れないのは、ガンジーです。ガンジーがインド独立を導いていくその原動力となつたのは、彼の内にあつた信仰でした。同時に最後に彼を暗殺したのも同じヒンドゥー教徒である過激派でした。私は彼の生涯に宗教の持つ明暗を見ます。こういう宗教の明暗はこれからはどこにでも起こりうることだと思います。

橋爪 私も最後に。宗教はワクチンだ

たとえば、オウムのイニシエーションの問題。イニシエーションというのは世界中の儀礼の中で行われる、ある修行の段階をいいます。オウムもイニシエーションの修行や儀礼を訴えかけ、若者たちを教団内に引き寄せていった。だから世界中の宗教儀式で行われるイニシエーションとオウムのそれとどこが相違するのか、そこを浮かび上がらせなければ、オウムの本質も真にわかつたことにはならない。

保坂 それはおっしゃるとおりです。私自身はあの問題について、オウムは仏教ではないと、それをずっとテーマにして書いてきました。オウムは仏教の基本を逸脱しているのです。

いずれにしても、もう宗教は他人事ではない、身近にあつて主体的に関らなければならぬものだという事です。こちらが理解していないからといって、むこうもこちらにアプローチはしてこない

という話が面白かったです。SARSの例もありますが、本来風土病であつたものがグローバル化により外との接触が増えてくると、それが病原体化して、大きなリスクになつていくことがあります。知のシステムとしての宗教も、おそらくそれと同じで、本来その生まれた風土や習俗習慣の中にあつて、均衡した知のシステムを維持してきたのだと思います。それが今では、世界各地で流動する中、宗教間でも互いに影響せざるをえなくなつたということでしょう。日本人も知らないうちに、なにかの宗教に感染しているかもしれない。そんな宗教の危機感の中で、宗教的なリテラシー、知識がますます求められているという指摘を大変共感をもつて聞いた次第です。

(二〇〇三年七月十八日、橋爪研究室にて)